

A high-level side event to commemorate the 30th anniversary of the DAPC Grants



【第66回国連麻薬委員会 サイド・イベントの報告】

<令和5年3月14日>

<開催趣旨>

1993年より公益財団法人麻薬・覚せい剤乱用防止センター(DAPC)が中心となり、日本国内で『「ダメ。ゼッタイ。」国連支援募金』として官民一体で行われてきた募金活動。

集まった募金は国際連合薬物・犯罪事務所(UNODC)を通じて、これまでに開発途上国延べ649カ国、780の薬物乱用防止プロジェクトに役立てられてきました。

この30年間の軌跡を振り返り、次世代を担う若者に向けて、薬物乱用防止活動の重要性とその活動は、乱用の防止だけでなく乱用に陥った者の早期発見、治療、教育、アフターケア、更生及び社会復帰までの措置が一体であることを伝え、さらに麻薬委員会に出席する各国代表者や民間団体に日本の取り組みを紹介しながら、薬物乱用防止活動が不可欠であることを再確認し、共に手を携えて世界から薬物乱用をなくすために、さらなる手立て(方法と手段)を探ることを目的として、国連麻薬委員会第66回会期中に30周年記念サイド・イベントを開催しました。



開催日: 令和5年3月14日、ウィーン国際センター カンファレンスルームM3

“Dame. Zettai.” [Never. Ever,] “Value yourself.” A high-level side event to commemorate the 30th anniversary of the DAPC Grants

「ダメ。ゼッタイ。」～愛する自分を大切に～ 国連支援募金30周年を記念するハイレベルサイド・イベント

総合司会: 健康福祉局薬務課 主任 平本春枝



プログラム1:総理メッセージ・UNODCワリー事務局長メッセージ

岸田総理大臣:ビデオメッセージ

「薬物乱用を未然に防止する活動や、不幸にして乱用に陥った方々に対し、社会復帰に向けた効果的な支援を講じていく活動は世代を超えて継続していく必要がある。若い世代の英知や自由な発想を結集して、画期的なアイデアが生み出されることを期待する。日本政府は薬物乱用防止の分野においても、国際社会と密接に連携していく。」

引原特命全権大使

「薬物乱用防止を含む世界の薬物問題に取り組むために、皆が市民社会やマルチステークホルダーに関与することが重要であり、このサイドイベントでの交流が、問題により効果的に取り組むために、多くのことを学べると信ずる。」

UNODCワリー事務局長

「UNODCは、若者による薬物乱用防止という私たちの共通の大義に対するDAPCの深い献身的な活動に感謝している。DAPCの寛大な貢献により、ここ10年だけでもDAPCの助成金は世界のあらゆる地域において、55の低・中所得国での139のプロジェクトを支援し、おおよそ166,000人が直接的に、間接的には400万人がその恩恵を受けた。DAPCの長年に渡る支援に感謝するとともにUNODCはDAPCとのパートナーシップをさらに何年も継続することを望んでいる。」



プログラム2:ドキュメンタリー・クリップ



国連支援募金の30年を振り返り、公益財団法人麻薬・覚せい剤乱用防止センターの成り立ちから、街頭での薬物乱用防止啓発活動・国連支援募金活動、日本から支援を受けた開発途上国の薬物乱用防止に立ち向かう姿などが含まれた動画。

プログラム3:DAPC 藤野理事長より提言

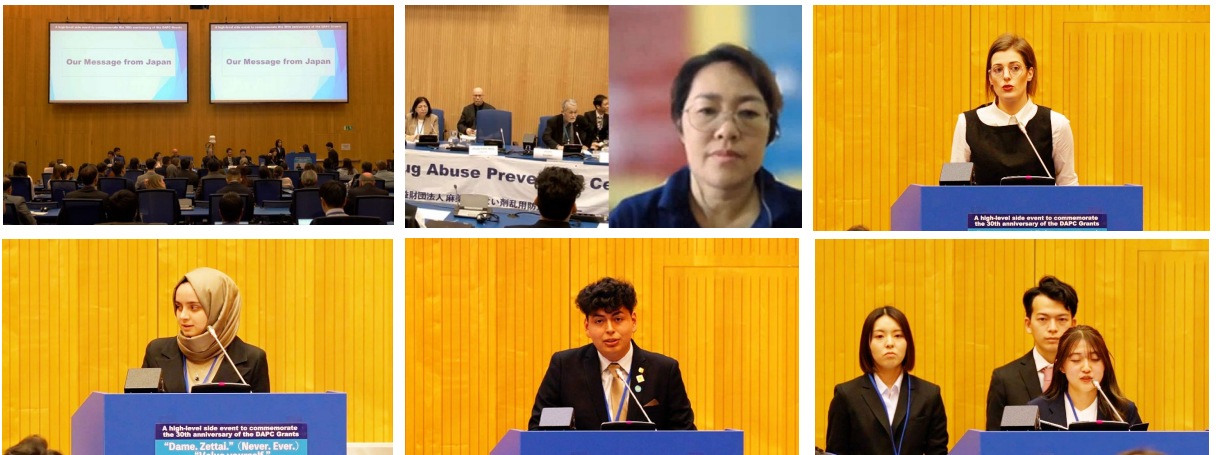


藤野理事長

「国際社会は薬物乱用の予防が最も重要であるとし、予防に向けて条約の一部を改正した歴史的事実、さらに改正事項には予防に加え、不幸にして乱用に陥った者がいれば、早期発見から、社会復帰までの措置が一体であることを規定している。薬物はまさにポケットの中の大量破壊兵器となりうるから、それぞれの国が違った課題、問題があったとしても、なくなることのない犯罪を防止するために努力を続けるのと同様に、薬物乱用防止の具体的な取り組みを継続しなければならない。」

プログラム4:ユース・パネル

日本からの国連支援募金により、薬物乱用防止活動が行われている多くの国の中から4か国の団体、ラオスのフレンズ・インターナショナル、モンテネグロのCAZAS、ペルーのCEDRO、トルコのトルコ・グリーン・クレセント・ソサエティから、それぞれ代表の若者4名が活動報告を行う。



日本からは、県・ライオンズクラブ・大学の3者が連携し、大学生が小学生に対して薬物乱用防止教室の講師となって活動している状況について発表した。

広島修道大学2年松長明音さん、比治山大学3年西沖魁晟さん、明治大学4年横路萌さんがそれぞれ、「広島は、戦争中に原爆で破壊された都市であるが戦後、市民が力を合わせ廃墟から見事復興したこと、それは社会の再出発に向かい薬物依存から回復への道筋と似ていること、薬物乱用は決して個人の問題だけでなく社会全体の問題であること。」
「その広島では、地元の人々が、地元の学校に通い、地元の子供たちと薬物について話し合っていること。さらに大学生が薬物乱用防止の指導者として、年の近い子供たちに話をする事で、子供たちが親近感を感じ、より深く興味を持って話を聞いてくれること。薬物に関する知識を持っていたことで、薬物乱用を回避できた体験談」
等を発表し、最後に3名で「未来に対して責任のある若者たちが、輝かしい未来を形成するために薬物乱用をなくすという共通の目標に向かって、共に手を取り合いながら歩むことが必要である」と呼びかけた。

プログラム5:未来へ向けたメッセージ



国際麻薬統制委員会 (INCB) パバディア委員長

「DAPCの薬物乱用予防支援活動30周年に改めて祝意を表すと共に、次世代に向けた薬物需要削減への支援をよろしくお願ひしたい。条約は各国が薬物乱用防止、早期発見、治療、教育、アフターケア、更生、社会復帰のために特別な措置をとるよう求めている。薬物取締の国際間の協力体制としての地域会議は存在し、具体的な結果につながっているが、予防、治療などについては議論する場がない。今こそ、皆で話し合う国際的な場を設けるべきである。」



厚生労働省医薬生活・衛生局 監視指導・麻薬対策課 佐藤課長

「薬物乱用は極めて深刻な社会問題となっている。薬物に手を出さないことが極めて重要であり、皆の理解と協力が欠かせない。そのためには特に若者が薬物乱用の有害性を理解するための教育、支援活動が非常に効果的である。」

最後に

藤野理事長から、「このサイド・イベントを機に、私たちは、予防や早期発見、社会復帰に関する実践的で革新的なアイデアを議論するための非公式なフォーラムを設立し、互いに協力できるようにするということを提案したい。」との閉会の挨拶があり、当サイド・イベントは盛況のうちに終了した。

○国連薬物・犯罪事務所(UNODC)ワーリー事務局長来日 (令和4年7月27日)

外務省内国際会議室において国連薬物・犯罪事務所ワーリー事務局長と(公財)麻薬・覚せい剤乱用防止センター藤野理事長及び在ウィーン国際機関日本政府代表部 引原特命全権大使、並びにそれぞれの担当メンバーが加わり、サイドイベントの実現に向けて意見交換が行われる。



○岸田総理表敬訪問 (令和5年3月7日)



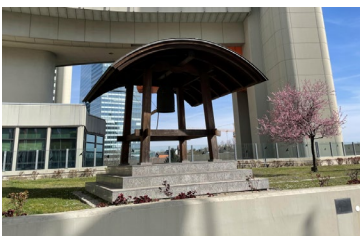
藤野理事長、日本ライオンズ 村木理事長、及び今回日本の薬物乱用防止活動の紹介とメッセージを呼びかける広島の大学生3名、彼らをサポートする広島フェニックスライオンズクラブのメンバーが岸田内閣総理大臣を表敬訪問。総理から励ましのお言葉をいただく。

○UNODCでの国連支援募金の贈呈式 (令和5年3月15日)



藤野理事長とワーリー事務局長との間で約定書が取り交わされた後、募金の贈呈式が行われた。

本寄付金は開発途上国NGOを通じて、青少年の薬物乱用防止教育や指導者養成プロジェクト等に活用されます。これまでに7億3千5百万円、のべ649か国、780の薬物乱用防止プロジェクト実施のために役立てられました。ご尽力をいただきました皆様、厚生労働省、外務省、日本政府代表部に感謝申し上げます。



○国連麻薬委員会とは

国連経済社会理事会の機能委員会の一つであり53か国のメンバー国により構成されている。機能は麻薬に関する諸条約の履行の監視、関連条約による麻薬等の統制に関するあらゆる事項について国連経済社会理事会に助言すること、必要に応じて薬物統制を強化する目的の勧告及び条約案の作成を行う等、いわば麻薬等の統制に関する実質的な意思決定の中心機関である。同委員会では、世界の薬物乱用状況の考察、それに対する世界行動計画の実施、国際条約の実施・改正等について協議、検討がなされてる。

【特設サイトQRコード】



ダメ。ゼッタイ。

検索

<https://dapc.or.jp/>

